

蓬 左

HÔSA



金沢文庫本 侍中群要

文書が伝える

大工の設計方法とデザイン

名城大学准教授 米澤貴紀

名古屋市蓬左文庫が所蔵する『伊藤満作家資料』の中に、神社の本殿を描いた文書がある。「一間社流作り」とタイトルのあるこの文書は、天保三年（二八三二）に柴田空之輔によって作られた。建物の側面と部分的に断面を描いた図は比較的細かく描かれ、その右側に書かれた文章には柱や大斗、ヒシキ（肘木）、破風など建物の部材が確認できる。ここから、これはどこかの神社の社殿の設計図にも見える。しかし、例えば最初の文章は「一柱大キサ間ニテ寸数イ御拝柱八分取」とあり、図中の部材寸法の書き込みを見ると、頭貫（柱の頂部に入る水平材）の幅が七分、長押（柱に打ち付ける水平材）の幅は六分と書かれている。こうした数値をそのまま実際の寸法と見ると、八分は二四・二四mm、七分は二一・二二mmとなり、実際の建物とは想定できない大きさになってしまふ。柱の太さの「寸数イ」という表記もあり、これらがそのまま長さを記したのではないと分かる。

実は、この文書は、実際に造る建物を描いてはおらず、モデル・雛形、あるいは覚書として記したものであり、そのため、各部分の寸法は、当時の大工たちが設計に使っていた技法・技術である「木割」に

基づいた特徴的な方法で書かれている。本稿では、この「木割」の方法と、これが使われた理由、そして、こうした文書の作成目的と価値を考えてみたい。

木割は、中世後期に発生し、江戸時代に普及した設計方法で、当時は木砕（木挫と呼ばれた。これは、建物各部や部材の大きさを、基準となる長さ（主として柱太さ）に分割・倍という操作を加えて決定する技法である。そして、柱太さは柱間（柱と柱の間の距離）を分割して求めることが多く、建物の全体規模と関連付けられている。つまり、木割の方法は、建物全体の規模から、柱を介して細部までを、分割と倍、すなわち比の関係でひとつなぎりとするもので、デザインにおいて重要な、全体と部分のポジションやバランスを比で記録するのである。また、比で決めることは、全体の大きさを多少変えた場合も、それに合わせて自動的に各部分の大きさも変更されるという利点がある。そしてなによりも、この比を知れば、誰でも同じデザインで設計できるのである。

では、分割と倍の操作をどのように行うのか、この資料を使って具体的に見てみよう。主柱（建物本体の円柱）の太さは、正面の柱の真どうしの間の距離（柱間）の寸数えとなる。この「寸数え」は一〇分割する操作を示す（一尺「一〇寸」に対して一寸を数えるということ）。つまり、柱間寸法を一〇等分した一つ分ということになる。続く御拝（向拝、正面の階段の上に掛かる庇状の部分）柱は、主柱太さの八分、すなわち一〇等分した八つ分となる。以下、

丸桁（垂木のかかる桁）の下面の幅は六分、部材高さが柱太さの八分というように、指示に従えば本殿の主要部分の寸法が決まり、図面にできる。一方、建物全体の規模は、各柱間に入る垂木の数（単位は枝）で決められる。垂木は全て等間隔に配置するため、このようにそれぞれの柱間を垂木の数の比で表せる。なお、この木割は、大工が抽象的な数字の計算ではなく、実際の部材の長さを意識して設計していたことも示している。例えば、初めの「寸数え」は柱間という尺の単位（一尺＝三〇三mm）で測る部分が基準となるため、その一〇分割は寸を使い、柱太さは寸で測る大きさのため、その一〇分割は分（一寸＝一〇分）で表している。同じ一〇分割でも単位が異なるのは、大工が柱間と柱太さ、柱太さとその他の部材のように相対的な大きさを考えているためなのである。

これを踏まえて、「一間社流作り」をみると、各部分の寸法が柱太さから決められているのが確認できる。しかし、見えないところ、例えば小屋裏などには木割が決められておらず、木割で寸法が指定されるのは、目に見えるところが主となるのが分かる。つまり、木割は建物の見た目を決める技術であり、さらには図面を描くためのものともいえよう。

以上より、木割の比を知れば、いつでも同じデザインで建物を設計できるといふ木割の利点があるだろう。また、木割は柱太さを基準とした比が基本であるから、技術を文章で紙に書いて記録できることも利点である。かつての大工や大

工一門は、その地位や職を保つため、一定水準の技術を必要とした。そこで、これらの利点を持つ木割が生まれたとされる。すなわち優れた木割があれば、理論上は、大工の能力に関わらず良い建物が設計できるため、棟梁はこれを作って書き留め、子孫や門弟は、家伝書・秘伝書として継承したのである。ただし、木割はあくまでも目安であり、その規定通りの建物はなとされ、これをもとにして、施主の要望や、地形、周囲の状況などに合わせたより良い建物を造るのが大工の技量であった。

最後に、今回取り上げた資料が「伊藤満作家資料」に含まれている意味・価値を考えてみよう。作者の柴田全之輔は、伊藤満作の養父・伊藤平左衛門八代守富の妻の父であり、その縁でこの木割が伊藤家へもたらされたと思われる。(両家の関係については、『蓬左』第一〇八号を参照)。そして、この文書の存在が、柴田家の知識・技術の伊藤家への伝達を示しており、名工の技術を記録し伝えるという、先述の木割を記した文書本来の役割を果たしている。そして、東本願寺の大工である柴田家とのつながり、技術の継承を示す文書は、伊藤家の格を表す点でも重要なものであっただろう。

実際にこの木割を満作が使ったか、また『伊藤満作家資料』に含まれる他の木割とそれらの内容については稿を改めることとしたい。

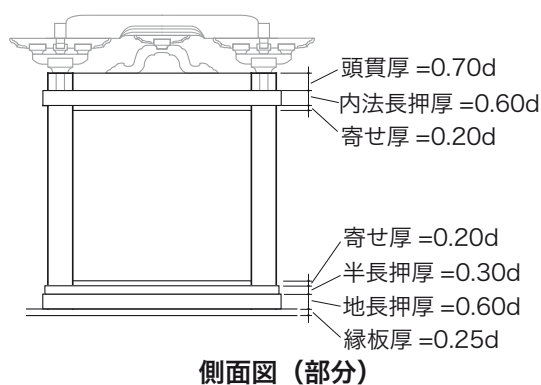
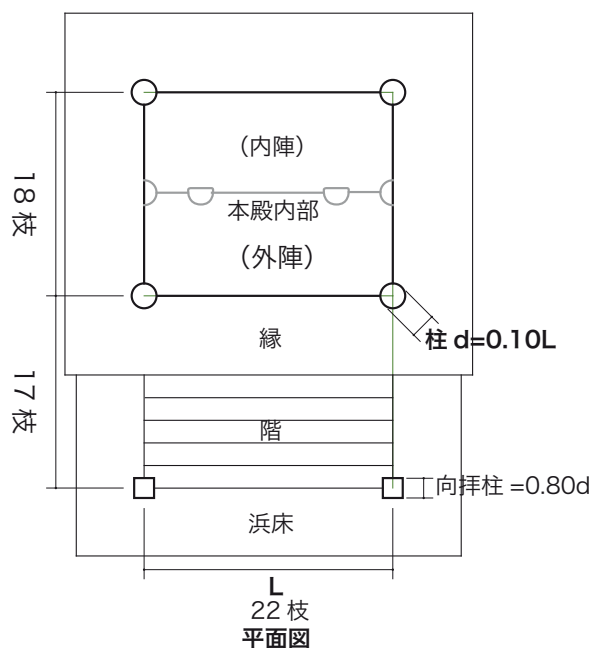
謝辞 本研究・調査はJSPS科研費25K01409の助成を受け
たものである。

○木割の基本と「一間社流作り」

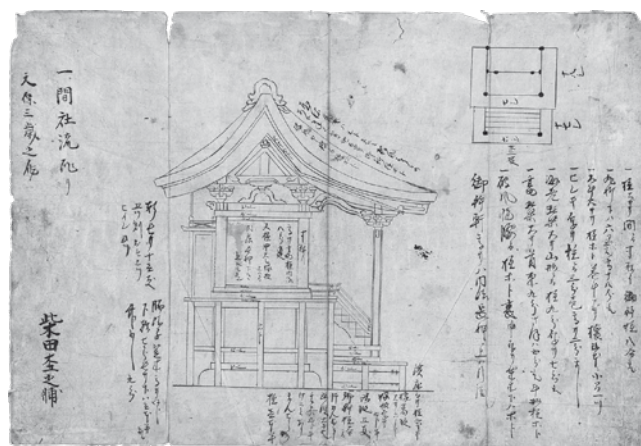
今回紹介した資料から木割の基本を見てみよう。

本文にも記したとおり、柱の大きさ(dとする)は「間ニテ寸数イ」とあり、正面の柱の間の距離(柱間、Lとする)の1/10となる。向拝柱は「八分取」なので柱大きさdの8/10になる。その他の部分も、長押(柱に打ち付ける横材)は柱の六分(6/10)、縁板の厚さは柱の2分半(2.5/10)というように、柱太さdを基準に決まっていく。この柱との比が木割の要点となる。

建物全体の大きさは、正面の柱間が22枝、側面の柱間が18枝と垂木枝数で定める。これは、柱の真が垂木の木間真(隣り合う垂木どうしのちょうど真ん中)に合うという決まりが前提となっている。



「一間社流作り」の木割解説図
筆者作成



「一間社流作り」
蓬左文庫蔵

金沢文庫本

―流離う本の物語―によせて

神奈川県立金沢文庫 貫井 裕恵

令和七年十一月十四日、神奈川県立金沢文庫において、特別展 金沢文庫本―流離う本の物語―が開幕しました。この展覧会は、日本が世界に誇る蔵書群である金沢文庫本を所蔵する、名古屋市蓬左文庫（以下、蓬左文庫）と神奈川県立金沢文庫（以下、金沢文庫）が連携し、蔵書を守り伝える営為とその歴史的意義をお伝えする展覧会です。令和八年二月には蓬左文庫に巡回します。金沢文庫には、蓬左文庫蔵の金沢文庫本全五件が、はじめて揃って「里帰り」するという、大変貴重な機会となりました。鎌倉時代の金沢文庫創設七五〇年を記念して、本展を開催しています。

神奈川県立金沢文庫は、現存する最古の武家文庫として知られており、その淵源は鎌倉幕府の執権・北条氏の親戚筋にあたる金沢北条氏の文庫に求められます。

金沢文庫は、北条実時（一二二四～七六）が武蔵国久良岐郡六浦莊金沢（現・神奈川県横浜市金沢区）の別邸のかたわらに設け



国宝 北条実時像 鎌倉時代
称名寺蔵・金沢文庫保管

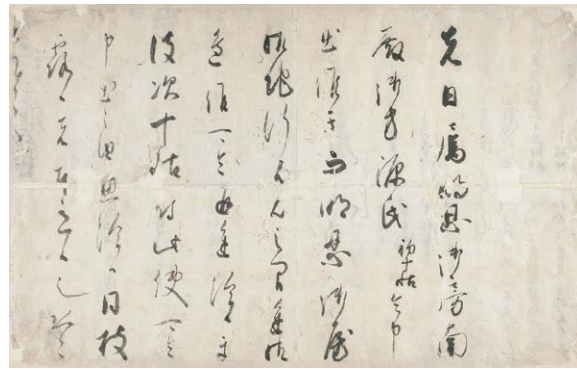
た文庫です。旧蔵本が国内外に現存しており、日本の古典籍や蔵書の歴史のなかで注目されてきました。六浦莊金沢は執権北条氏の支流にあたる金沢北条氏の拠点として栄え、文庫には菩提寺である称名寺が隣接していました。金沢文庫跡に隣接する区域からは、金沢北条氏の館跡とみられる遺構が確認されており、館・菩提寺・文庫が揃い、拠点を形成していたものとみられます。これは金沢北条氏に限ったことではなく、鎌倉時代を生き抜いた有力武士たちもまた、中世都市鎌倉の諸所にこのような拠点を構えていたことが、『吾妻鏡』や国宝「称名寺聖教・金沢文庫文書」（称名寺蔵・金沢文庫管理）などの文献資料と考古遺物から推定されています。

金沢文庫の蔵書群は、政治・文化・歴史など多岐にわたる漢籍・和書などからな

り、その蒐書事業は実時の子にあたる顕時（一二四八～一三〇一）、顕時の子・貞顕（一二七八～一三三三）、貞顕の子・貞将（？～一三三三）の三代にわたって継承されていきました。これらは「金沢文庫本」と呼ばれ、その形成期から現代にいたるまで、日本中世における「知」の精華として珍重されています。

さて、本展を担当した金沢文庫学芸員の私からみた、本展のミどころを御紹介いたします。第一に、称名寺や金沢文庫が所蔵する金沢文庫本とともに、「里帰り」した蓬左文庫蔵の五件の金沢文庫本を一堂に会すること、在りし日の鎌倉時代の金沢文庫に拡がっていた書庫内の光景をご覧いただけることです。金沢文庫は、中世鎌倉の「知」のセンターとも呼ぶべき、国内外の貴重な書物の宝庫で、政治や法律の書から女官の回想録に至るまで多彩なジャンルからなります。鎌倉幕府の人びとは、それらから学び、鎌倉幕府の運営に生かすために、積極的に蒐集したのです。金沢文庫本を蒐集した金沢北条氏歴代の肖像画である国宝「四将像」ともにご堪能ください。第二に、両文庫が所蔵する源氏物語ゆかりの文化財の時を越えた邂逅です。重要文化財「河内本

源氏物語」(蓬左文庫蔵)と、鎌倉時代の金沢文庫で管理されていた『源氏物語』が、北条氏一門の間で貸借されていたことを伝える国宝「金沢貞顕書状」(称名寺蔵・金沢文庫管理)や国宝「逆修施主段」(紙背・源氏物



国宝 金沢貞顕書状 称名寺蔵・金沢文庫管理

語系図」(同上)などを、揃って展示しています。尾張徳川家で大切にされた「河内本源氏物語」は、かつては金沢北条氏にも愛読されていました。金沢文庫から流出してもなお、多くの人びとの手を経て、書物を守り伝えられていったのです。第三に、紙背文書です。紙が大変貴重であった中世、古文書として使用された料紙を反古紙とし、そ

の裏面に典籍や日記、聖教などを書写して二次利用しました。こうして伝来した古文書を紙背文書(裏文書)と呼びます。重要文化財「斉民要術」と同「侍中群要」(ともに蓬左文庫蔵)にも、紙背文書が多数含まれています。「斉民要術」は初代の北条実時が、「侍中群要」は三代の金沢貞顕が書写させていることから、前者は実時が関与した蒙古襲来への対応や訴訟関係の書状が、後者は貞顕周辺の政治的・文化的な状況がうかがえる書状がみえます。金沢文庫本のなかで紙背文書を有するものは貴重です。国宝「称名寺聖教・金沢文庫文書」は、称名寺僧侶たちの宗教的述作の料紙として二次利用されたために伝来した、鎌倉時代末期から南北朝時代を中心とした紙背文書がみえますが、「斉民要術」はそれらより若干早い時期の、また「侍中群要」はほぼ同時期の紙背文書が中心を占めます。すなわち、両紙背文書群をあわせて考察することで、はじめて歴代金沢北条氏の実像にせまることができ

るのです。徳川黎明会を創設し、尾張徳川家の什物と書籍を守り伝えようとした徳川義親は、両書の表面はもちろん、その裏にあたる紙背文書の検討が進むことを願っていたとい

います。数多の人びとの許を「流離」つてきた金沢文庫本が結んだ両文庫の縁により、本展を開催するに至りました。開催準備を進めるなかで、令和六年二月には、NHKブラタモリ「鎌倉の寺々北条氏の寺でわかる! 鎌倉幕府の偉業とは」にて国宝「文選集注」(称名寺蔵・金沢文庫保管)と重要文化財「河内本源氏物語」が共演を果たし、全国的に大きな反響をいただきました。本展を通じて、書物を守り伝えるという、日本文化の基層を形づくった特殊文庫の営為の一端に触れていただき、両文庫に関心をお寄せいただけたら幸いです。



金沢文庫会場 展示室風景写真

『銅人經』拓本を探る!? ⑥

書物としての『銅人經』蓬左本を考える

東京大学大学院講師 小島浩之

このコラムでは、これまで五人の研究者が、名古屋市蓬左文庫所蔵の『銅人腧穴鍼灸図經』(以下『銅人經』、うち蓬左文庫所蔵本については蓬左本と略)について様々な角度から紹介を試みてきた。『銅人經』の医学書としての概要、宋代以来のテキストの流伝、蓬左文庫にもたらされるまでの来歴から、蓬左本の書物としての構造や裏打紙に使用された文書反故紙の概要と背景にある明代の行政に至るまで、数多くの『銅人經』にまつわる情報が提供されてきた。本稿ではこれらの知見を踏まえて、書物としての蓬左本についてももう少し掘り下げてみたい。

蓬左本の記録方法・技術

内容の記録方法や技術からみた場合、書物は印刷物(刊本)と筆写したもの(鈔本≡写本)に二分される。

蓬左本は、石に刻まれた『銅人經』(明代の正統刻石)に紙を押し当て、その上から少量の墨を含ませたタンポ(綿を丸めて布や裂で包んだもの)で打ち、石の表面の凹凸を紙に写し取ったものである。こうした技術、さらにはこの技術により紙に写し取られた複製物のことを拓本という。拓本は

印刷術の祖型とされている。ただし、印刷とは版木や活字などの原版に墨やインクを塗布した上で、紙を押し当てて複製を作成する技術を指すから、原版たる石に押し当てた紙の上から墨を打つ拓本は完全なる印刷物とはいえない。

一方、テキストだけに着目すれば、同一の刻石から同時期に採った拓本ならば、精粗の差は出るものの鈔本のように諸本間で大幅な異同は生じない。このように記録方法・技術からみると、拓本は刊本に準ずる性質を持つと考えてよさそうである。ただし、刊本や鈔本は、書き写したり版木を製作したりする段階でヒューマンエラーが起きやすい。この点、蓬左本のように刻石の内容をそのまま転写した拓本の方が、標準テキストの写しとして優れておりかつ貴重であることは言うまでもない。

なぜ石に刻むのか

ところで『銅人經』はなぜ石に刻まれていたのであろうか。この理由を解き明かすひとつの鍵は「經」という言葉にある。織物は経糸と緯糸の組み合わせから成っているが、この「たていと」こそ「經」字の本義である。経糸は織物の構造部分の基盤となることから転じて、「經」字は物事の根本や不変の原理を意味する。儒教の聖典を經書、兵法や算学の基本的な書物をそれぞれ武經や算經と呼ぶのは、これらがみな該当分野において根本となる重要なテキスト(經典)だからである。すなわち『銅人經』に「經」字がつくのは、これが中国医学

における經典であるからにほかならない。

儒教の經典においては、後漢以降、字体の統一とテキストの標準化が進められた。これらは石に刻むことで情報として保存され、国家に管理されたのである。これを石經といい、中国史上では熹平(後漢・正始(魏)・開成(唐)・図參照)・広政(後蜀・嘉祐(北宋)・紹興(南宋)・乾隆(清))の七種の石經が知られている。標準テキストの保存に石が使われるのは、紙より永久性を担保できること、公開制に優れていることなどが挙げられる。

五代・後唐の長興三年(九三三)には宰相の馮道が、旧都長安にあった開成石經に基づき当時の首都洛陽で經書を出版している。科挙の試験問題は国家標準のテキストに則り出題されたため、国家は石經に基づいた經書を、民間はそれに依拠した受験参考書を出版した。北宋以降、石經は經書の印刷・出版の大本となったのである。『銅人經』が石に刻まれた最大の理由も、中国医学における經典の標準テキストを保存するためだと考えてよい。詳しくは辻正博氏のコラム(『蓬左』一〇七)を参照されたいが、『銅人經』刻石の初見である北宋の天聖刻石は、唐代までの鍼灸の学説を整理・編纂したものであるから、まさに国家の標準テキストだと言える。蓬左本は天聖刻石を模刻した明の正統刻石の拓本であるから、北宋以来の標準テキストを今に伝える貴重な資料なのである。このため、今後の研究の展開次第では、現存する『銅人經』の刊本・鈔本類が、天聖刻石や正統刻石からどのように系

統分化したのかを明らかにできる可能性がある。

また、『銅人經』の刻石が宮廷医官の勤務する皇城内の太医院に置かれていた点も興味深い。古くから各官庁の業務にとって必要な法令等は、庁舎の壁に大書したり庁舎内に刻石として置かれたりした。こうすることで、官吏の目に触れやすくし、注意や戒めを与え、奮起を促す効果が期待されたのである。ここから察するに、『銅人經』の刻石が太医院に置かれていることには、勤務する医官が医術の基本を疎かにしないよう常に目の届く範囲に標準テキスト全文を掲げておくという、官僚統制の意図を感じざるを得ない。

いずれにせよ、国家運営上の必要性から『銅人經』の刻石が作成されたのは間違いない。媒体が紙ではなく石に置き換えられているだけだと考えれば、『銅人經』の刻石は国家が発信した情報、つまり石に書かれた公文書だと理解し得る。このようにみると、蓬左本は公文書の貴重な写ということにもなる。蓬左本の裏打紙に明代の公文書の反故紙が使われていることは、大野晃嗣氏のコラム（『蓬左』一〇九）に詳しい。一方でオモテは医学書としての側面ばかりが強調されるものの、見方を変えればこちらもまた明代公文書としての側面も持っているのである。

蓬左本のできるまで

これまで述べてきたことから、『銅人經』がなぜ石に刻まれたのか、そして刻石からどのようにに情

報を写し取ったのかについてはご理解いただけたかと思う。次に拓本が書物に仕立て上げられる過程を垣間見たい。書物には何らかの装幀がなされている。書誌学上、装幀は紙の継ぎ方・表装方法・表紙の付け方・綴じ方などの違いからいくつかに分類される。たとえば、巻物と通称される巻軸装、仏教経典に代表される継いだ紙をつづら折りした経折装（折本）、二つ折りの紙葉を束ねて糸で綴じた線装などは今でも目にする。

蓬左本の装幀は「折帖装」と総称されるもので、本文紙がつづら折りの点では経折装に等しい。ただし、一折あたりの紙幅が広いこと、紙の継目が折山部分に重なるよう設計されることなどから経折装とは区別される。折帖装は主として絵画や拓本を書物に仕立てる場合に用いられ、うち書道（書法）の手本に利用されるものは、「書法用の折帖」の意から法帖と呼ばれる。ただ現在では、折帖装の拓本は書道の手本か否かを問わず法帖として通じているので、本稿でも以下、法帖としておく。なお、蓬左本の製本構造の詳細については、井上充幸・猪俣貴幸両氏（『蓬左』一〇五および一〇八）のコラムも参照されたい。

『銅人經』の祖本たる北宋の天聖刻石の高さは二・〇五mと推定され、本文も五段に分割されている。これに基づいて重刻された明の正統刻石もほぼ同じであろう。石の大きさから考えて複数区画に分割して数人がかりで拓本を採ったに違いはない。その後は拓本を順序よく並べて整理し、五段

であった本文を一続きのものとして、一定の折幅の紙中に収まるように切り貼りしてつなぎ合わせる編集作業が必要となる。蓬左本の場合、一行あたりの字数は原刻石のままであるが、行間は法帖に仕立てる段階で調整されている。さらに裏打・表装といった作業も加えなければならぬから、法帖として書物に仕上がるまでには一般的な刊本を作る以上の労力が費やされたのである。

そもそも『銅人經』の刻石は北京の内城しかも太医院の中にあつたわけだから、誰もがアクセスできるわけではない。かつ法帖の完成までに投入された労力と時間を考慮すれば、それだけでも蓬左本が通常の書物とは一線を画す存在であることが理解されるのである。



開成石經（辻正博氏撮影）

侍中群要―流離いの果てに―

『侍中群要』は宮中の役職、藏人(天皇側近の事務官)の職務について行事例に編纂した書物。金沢文庫本は現存最古写本で、これを基に江戸時代以降多くの写本が作られている。

書写の指揮を執った金沢北条氏三代・貞顕は、六波羅探題南方在任中に善本の書写・蒐集を積極的に行っており、本書もその活動の中で制作されたものと考えられている。なお、使用料紙は金沢北条氏の文書群の裏面を転用したものである。

貞顕自筆の巻十奥書には、六波羅評定衆・水谷清有所蔵本をわずか十日余りで書写を終えたこと、水谷家本は養和元年(一一八一)に成立した五品羽林親家所蔵本を書写したもので、上下巻構成で閲覧に不便であったため、書写時に十巻本に分割した旨記されている。なお羽林家本のテキストは、転写の過程で本来の姿が崩れている箇所があるため、本書にはその影響と思われる表記等が散見される。

文禄二年(一五九三)に豊臣秀次より日野輝資に譲られ、慶長十九年(一六一四)、日野から家康へと献上された。家康の没後、駿河御譲本として尾張徳川家初代義直へもたらされた。

寛永元年(一六二四)、後水尾天皇の要請を受け、近衛信尋・松花堂昭乗が仲介役となって、義直所蔵の金沢文庫本を貸出したようであるが、「芥民要術」のみ原本で対応し、「侍中群要」はこの貸出のために謄写本(108・57)を作成している。〔禁中へ御借シノ御書籍之覚〕

尾張徳川家に伝来した金沢文庫本は、蔵書目録等の記録上、六件確認されているが、明治維新期の混乱の中で「宋版」唐書「宰相世系表」(東京国立博物館蔵)が流出。残り五件は今でこそすべて蓬左文庫に伝存しているが、実は「侍中群要」もこの時期に一旦流出している。しかし昭和十年(一九三五)、蓬左文庫が開館すると同時に、再び尾張徳川家へと帰することになった。

流出から帰属にいたる約半世紀間の事情は不明ながらも、流出した蔵書のほとんどが所在不明となっている中、「侍中群要」の帰還はまさに奇跡的な事象であるといえよう。

(蓬左文庫 星子桃子)

【参考文献】

日崎徳衛校訂・解説『侍中群要』(吉川弘文館、一九八五)
徳川美術館「徳川義直と文化サロン」(二〇〇〇)
貫井裕恵「名古屋市蓬左文庫蔵『侍中群要』紙背文書について」(『金沢文庫研究』・『鎌倉遺文研究』二〇二二・二四)
*令和八年二月七日(土)・四月五日(日)まで企画展「金沢文庫・蓬左文庫交流展『金沢文庫本―流離う本の物語―』」で、「侍中群要」を展示(巻替えあり)しています。

蓬左通信

神奈川県立金沢文庫との連携展「金沢文庫本―流離う本の物語―」ですが、昨年十一月から今年一月にかけて、まず金沢文庫で開催されました。開幕直後の展示解説会は盛況で、図録の売れ行きも好調とのこと。担当学芸員一同ホッとしています。

今回金沢文庫に、蓬左文庫所蔵の金沢文庫旧蔵書五件すべて出陳しましたが、名古屋市へ移管後ながら、過去の貸出記録を辿ると、唯一「侍中群要」のみ、金沢文庫に貸出された形跡がありませんでした。本当に久しぶりの里帰りであったようです。

さて、いよいよ二月から蓬左文庫会場が開幕します。国宝の金沢北条氏四代の肖像画、通称「四将像」(称名寺蔵をはじめ、金沢文庫および、金沢北条氏の菩提寺・称名寺の名宝が出陳されます。特に「四将像」はほぼ門外不出の名宝ですが、今回特別に、四将すべての出陳が叶いました。この機会をぜひお見逃しなく。

(蓬左文庫 星子桃子)

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <https://housa.city.nagoya.jp/> 〈蔵書検索もできます。〉

ご利用案内

■休館日/月曜日(祝日・振替休日のときは直後の平日) ※変更することがあります。

■展示室/【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)

■閲覧室/無料 館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。

電話・郵便による申込みも可。

